目次

第I部　地震予知の現状をめぐって　1

はじめに　3

第1章　地震予知と社会　☆ 溝上　恵 ☆　5

1.1　複雑な問題をはらむ「地震予知」 5

1.2　地震情報を社会に還元するときにつきまとう問題とは . . . 7

1.3　「大地震はいつどこで起きるかわからない」を前提にした地震防災計画 8

1.4　先進的な地震学者、今村明恒の業績 10

1.5　巨大地震の切迫性を想定した防災計画 12

1.6　地震の本性に根ざした予知研究を 16

1.7　東海地震の直前短期予知と「いわゆる予知」との違い . . . 18

1.8　「前兆滑り」に伴う地殻変動の早期検知 22

1.9　GPS、歪計による異常検出から判定会召集までのシナリオ . 24

1.10　東海地方およびその周辺における最近の異常変動 28

1.11 まとめ 32

第２章 地震予知の可能性・現実性 ☆ 島村英紀 ☆ 35

2.1 地震はなぜ繰り返す 35

2.2 パークフィールドでの教訓 36

2.3 物理学としての地震予知が出来る条件と現状 40

2.4 前兆への希求が数々の報告を生む 42

2.5 報告された前兆に客観性があるかどうかが問題 45

2.6 破壊現象としての地震の解明は非常に困難 48

2.7 応用開発級の国家プロジェクトとなった「予知大国」日本の研究体制 50

2.8 阪神・淡路大震災以後の体制変化 51

2.9 縄張り意識がもたらした伊東沖噴火時の対応 53

2.10 備えがあれば災害は減る 55

第３章 全体討論 57

3.1 予知と予測の使い分けはあるのか、どうか 57

3.2 東海地震の判定会の流れについて 59

3.3 「直前予知」の段階で情報が発信される 62

3.4 判定の最終責任者と行政責任をめぐって 65

3.5 判定会の判断が与える社会への影響について 67

3.6 天気予報のデータ開示体制を地震に応用する可能性について 69

3.7 歪み計の観測体制とコストをめぐって 72

3.8 前兆現象と地震の物理学について 74

3.9 地震の物理学とデータとの関係 77

3.10 必要なのは、研究体制、人員、予算の拡充か 80

3.11 曖昧な領域を扱う社会科学 82

3.12 地震予知に関する基本的なバックグラウンドとは 85

第４章 ワークショップの開催にあたって ☆ 神沼克伊 ☆ 89

第II部 科学ジャーナリズムと社会 93

第１章 現代の科学ジャーナリズム
その問題点と具体的な解決方法 ☆ 井上正男 ☆ 95

1.1 「判断困難の時代」の科学 97

1.2 今のままの科学ジャーナリズムは必要か 98

1.3 科学ジャーナリストのアプローチ法 103

1.4 大学研究者のアプローチ法 109

1.5 まとめ／予見のできる「科学的な科学ジャーナリズム」の構築115

第２章 日本の科学ジャーナリズムは「啓蒙」の時代を乗り越えられるか
科学ジャーナリズムの可能性・方向性 ☆ 林 衛 ☆ 119

2.1 はじめに／自己紹介を兼ねて 119

2.2 日本における科学ジャーナリズムについての基本認識 . . . 121

2.3 科学の歴史と科学ジャーナリズム 125
2.4 最近の科学事件から見た、日本の科学ジャーナリズムの現状 128
2.5 結びに代えて／成熟した市民社会仮説に向けて 141

第 3 章 全体討論 147
3.1 「中立」はありえないことに、人々が気づきはじめた . . . 147
3.2 科学ジャーナリズムは、防災と地震予知が別物と伝えたか . 149
3.3 科学ジャーナリズムの責任の取り方とは 151
3.4 科学ジャーナリストは社会の方向づけに責任をとるべきか . 154
3.5 ジャーナリストとしてのセンス、感性を磨く教育を 158
3.6 成熟社会における科学ジャーナリズムのあり方とは 161

第 III 部 エビデンスの質の高さと社会における利用 165

はじめに 167

第 1 章 予防的アプローチのリスク論
社会学的な観点から ☆ 平川秀幸 ☆ 169
1.1 レギュラトリー・システム 170
1.2 予防的アプローチのリスク論 175

第 2 章 全体討論-1 197
2.1 ある科学への規制がすべての科学を規制するリスクについて 197
2.2 審議会システムが機能しにくい日本 199

2.3 レギュラトリー・サイエンス研究の層を厚くするために . . 201

第 3 章 リスク・コミュニケーションはどのような考え方か
☆ 吉川肇子 ☆ 205
3.1 リスク・コミュニケーションの歴史 205

第 4 章 全体討論-2 219
4.1 リスクの定量化をめぐって 219
4.2 リスクの専門家と素人の関係 221
4.3 リスク情報を社会全体で共有する意味 223
4.4 リスク回避のための共通プラットフォームは可能か 224

第 5 章 エビデンスの質の高さと社会における利用
☆ 柳本武美 ☆ 229
5.1 目標 229
5.2 プログラム 230

第 IV 部 一般論文 233

第 1 章 情報社会と〈人間〉の変容 ☆ 合庭 惇 ☆ 235
1.1 はじめに 235
1.2 メディアと公共圏 237
1.3 近代的主体の成立 241
1.4 近代的主体の終焉 245

第 2 章　科学ジャーナリズムの研究と教育について思うこと
☆ 保坂直紀 ☆　249

2.1　科学ジャーナリズム研究の現状 249

2.2　日本の科学ジャーナリズムの現状 250

2.3　なぜ現状ではいけないのか 252

2.4　現在の困った状況を打破するために 253

2.5　市民に歓迎される科学ジャーナリズム研究組織 254

2.6　信頼される科学ジャーナリズムを目指して 256

第 3 章　STS 研究教育センターの構想　☆ 柴崎文一 ☆　259

3.1　はじめに：STS の定義 259

3.2　STS 研究・教育の目的と必要性 260

3.3　総研大において STS 研究・教育を推進することの必然性 . . 262

3.4　当面の活動：総研大 STS レクチャーシリーズの開催 264

3.5　おわりに 265